

東の国 から?心

小泉八雲◎著
平井呈一◎訳

恒文社

東の国 から・心

小泉人雲○著
平井呈一○訳

恒文社

译著

原国籍为英国的著名作家小泉八云的散文集



© 1975

東の国から・心

定価二、三〇〇円

一九七五年一二月一〇日 第一版第一刷発行
一九八六年五月一〇日 第二版第一刷発行

著者 小泉 八雲
訳者 平 呈一
發行者 池田恒雄
發行所 株式会社恒文社

（三） 東京都千代田区三崎町三一〇一〇
電話（出版部）〇〇三一二三八一〇一八一
（出版部）〇〇三一二三八一〇一六四
振替口座（東京）五一一三五八二四
印刷統計 塚印 刷工業（株）
製本 製本

落丁・乱丁の場合はお取りかえいたします。

1095-002013-2273



写真 ① 熊本で第五高等学校の生徒たちとの記念写真（部分） 前列中央が嘉納治五郎校長、その左やや側面を向いているのがハーン、校長の右が秋月胤永氏。

④ 同じく五高卒業記念写真、前列右から二人目（白服）がハーン、中央が秋月氏。

⑤ 嘉納校長をかこんで五校柔道部の人々
〔「九州の学生とともに」「柔術」など参照〕

—小泉一雄氏所蔵—

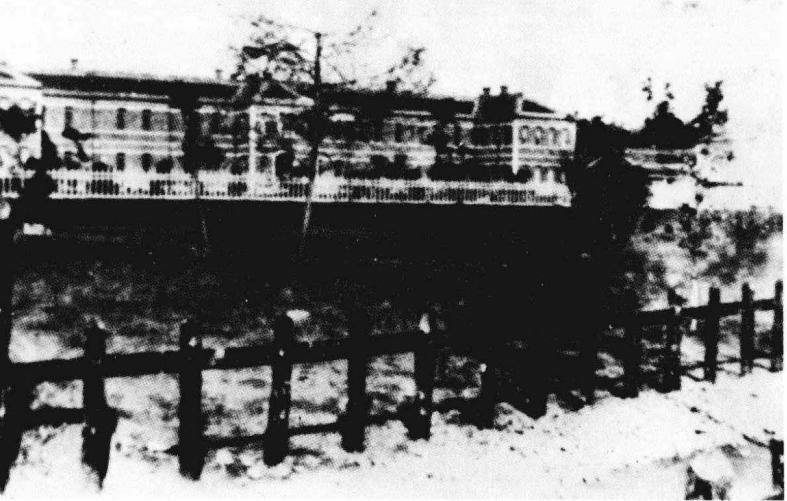


写真 ⑤ 当時の第五高等中学校校舎、下はその裏面のハーン自筆の説明。(これは正面の建物を示したもの。後方にある大きな木造建物は、寄宿舎、寮室、勉強室、写真的建物は教室だけで、右手の煉瓦建ての建物は化学部教室の旨記されている)
—梶谷泰之氏所蔵—

写真 ⑥ 明治25年1月ハーンが出雲大社宮司千家尊紀氏へ出した年賀状とその封筒の表裏
—梶谷泰之氏所蔵—

This only shows the front buildings. The larger buildings which are of wood are behind these. They are the boarding-houses and dormitory and students' room for exercising. The buildings in this photo are the class-rooms only. The smaller brick building on the right is the laboratory.

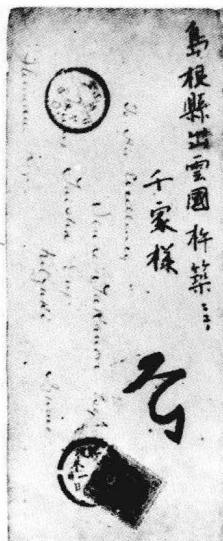
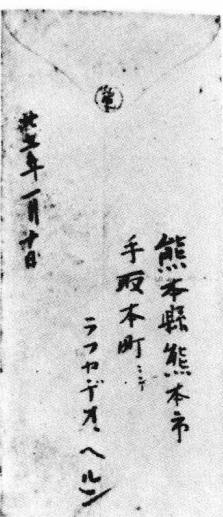
Sensei Takanori Engr. Nitoguchi,
Izumo Taisha Gijū,

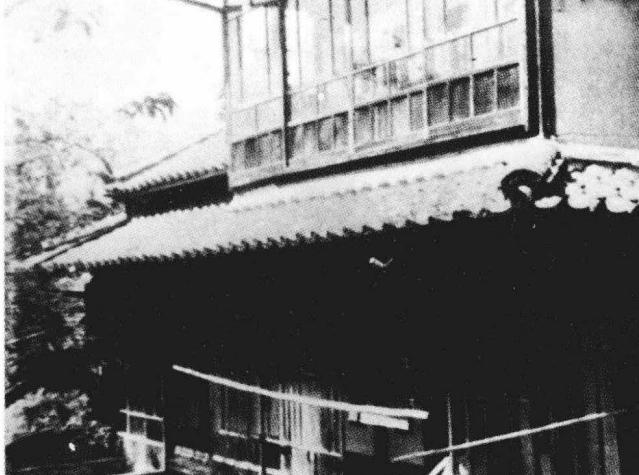
Reverend and dear Sir,-

At the opening of this New Year, I pray you to accept the assurance of my constant gratitude for your many extraordinary kindnesses to me, - until some time when I shall be able to convey my thankfulness in a better way than by words only.

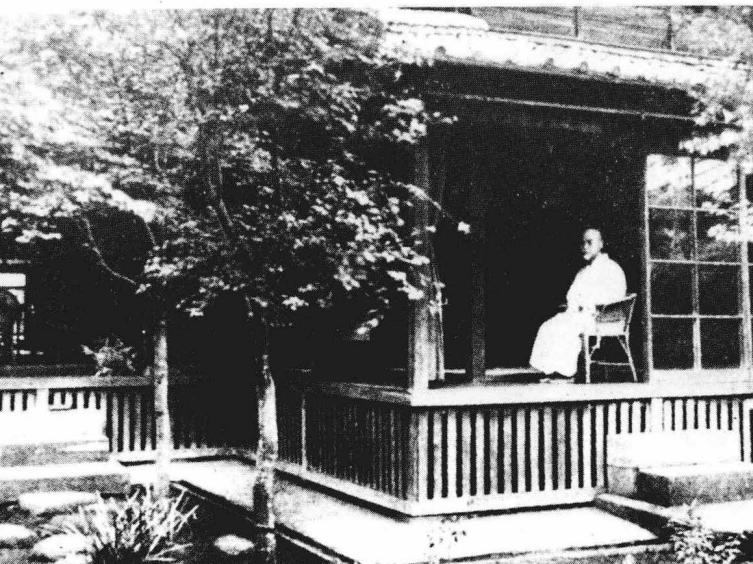
May the fresh year bring you all success, happiness, good-health and prosperity in all things, is the sincere wish of You most humble and obedient servant,

此为试译 Lepidus & Hearn





真 ① ⑤⑥ 熊本堀端の旧居
— 小泉一雄氏所蔵 —
④ 同上の庭
⑦ 熊本手取本町の旧居（人物は
家主で教子であった赤星典太氏）
— 丸山学著「小泉八雲新考」所載 —



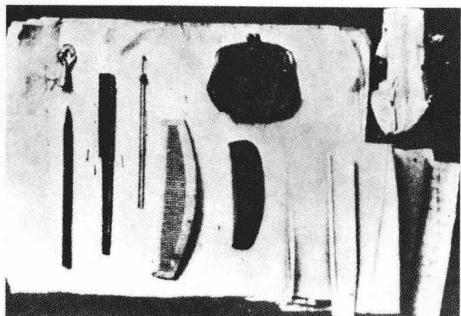


写真 ① 富山勇士像—小泉一雄氏所蔵— 当時ポルトガルの雑誌セロエズなどにも掲載
② 京都未慶寺にある勇士の墓。
③ 勇士の遺品—沼波瓊音著「大津事件の烈女 富山勇士」より—
〔本巻「勇士」第8巻「京都紀行」参照〕
④ 横浜の地蔵堂〔「横浜で」参照〕—小泉一雄氏所蔵—

東の国から・心

目
次

東の国から

夏の日の夢.....五

九州の学生とともに.....四

博多で.....九

永遠の女性.....七

生と死の断片.....一元

石仏.....一吉

柔術.....一七

赤い婚礼.....一五三

願望成就.....二九二

横浜で.....三二五

勇子——ひとつの追憶.....三三三

心

停車場で.....三五六

日本文化の真髓.....三六三

門つけ	三九三
旅日記から	四〇一
あみだ寺の比丘尼	四二三
戦後	四三九
ハル	四五九
趨勢一瞥	四七〇
因果応報の力	四九九
ある保守主義者	五一三
神々の終焉	五一三
前世の観念	五一四
コレラ流行期に	五六四
祖先崇拜の思想	六〇三
きみ子	六三九

裝幀・朝倉

攝

東の国から

—新しい日本における幻想と研究—

「西と東が離れているほど遠く——」

出雲時代のなつかしいおもいでに

西田千太郎へ

夏の日の夢

一

夏の日の夢

その宿屋は、わたくしには極楽のように思われた。そして、そこの女中たちは、まるで天女かなんぞのように思われた。というのは、ちょうどその時わたくしは、近代的設備ならなんでもそろっている、ゆっくりと手足ののばせるようなヨーロッパ風のホテルはないものかと思つて、この国のある開港場へそれをさがしに行って、じつはそこからほうほうのていで逃げ出してきたところだったからである。そんなわけで、そこの宿屋のゆかたにくつろぎ、ひんやりとした当たりのやわらかな畳の上にあぐらをかいて、すずしい声をした女中たちにかしづかれ、きれいなものに身のまわりをかこまれながら、ゆっくりと足腰をのばしたときには、まず、十九世紀のあらゆる心労からほつと救われたような思いがした。朝の膳には、竹の子とハスの煮つけが出た。それから、極楽のおみやげに、うちわを一本くれた。そのうちわには、波打ちぎ

わに、大きな波がひとつどんと白く砕け散つてゐる上に、あさぎ色の空へむらむらぱつと舞いあがつてゐる、チドリの絵がかいてある。この絵ひとつを見るだけでも、わざわざここまで出かけてきた旅の苦労を、きれいさっぱり忘れるだけの値打があつた。みなぎる光り、人を威圧する壮大な生動、沙風の凱歌、——この三つのものが、渾然と一幅の画中にとけあつてゐる絵だ。それを見たとき、わたくしは思わず、あつと快哉を叫びたくなつたくらいであつた。

二階ざしきの縁がわの、杉丸太の柱のあいだから、海ぞいの、くすんだ色をした美しい町の家並が、ひと目に見わたされる。碇をおろしたまま、うつらうつら眠つてゐるような幾そうかの黄いろい帆かけ舟、見上げるばかりの深緑の断崖が両がわから迫りよつたあいだにひらけている入江の口、そのむこうに、はるかかなたの水平線まで、いちめんにぎらぎら光り輝いていいる夏の海。その水と空と相つらなるあたりに、さながら古い思い出を見るようく模糊として打ち震んでゐるあいたいとした山のすがた。そうしてしかも、くすんだ色のその町並と、黄いろい幾そうちかの帆かけ舟と、深緑の断崖とをのぞいたあとは、なにもかも、天地はただひとりの紺碧に塗りこめられてゐるのである。

そのとき、恍惚としたわたくしの瞑想のなかへ、ふと風に鳴る風鈴の音のようなすずしい声が、しとやかな挨拶のことばを奏でだした。わたくしは、その声の主が、この玉樓の女将おがみだなとすぐに心づいた。おかみは、茶代の札を言いにあがつてきたのである。わたくしは、さつそくおかみのまえに手をついてあいさつをした。おかみというのは、まだごく年の若い、それこ